

マルクス『学位論文』(1841年)について

—マルクス—ヘーゲル関係理解のために—

山中 隆 次

マルクス主義の3つの源泉の1つ、ヘーゲルとマルクスの関係をめぐる問題は、思想史研究上、継承関係の問題としても多くの論争を生みだしている問題の1つであろう。それが最近では、「労働」という経済学の問題にまで下降して研究され、論争されていることは、すでに『経済研究』第8巻第3号で大野氏によって詳細に紹介されているところであるが¹⁾、そこでも両者のつながりを主張するものと対立を強調するものとの論争は、なんらの解決点にも達せず、依然として平行線をたどっているありさまである。その平行線も、帰するところは、一方は、弁証法による両者の結合を強調する線であり、他方は唯物論と観念論の対立を重視する線であるといえよう。しかしヘーゲルといひマルクスといひ、その弁証法は観念論とまたは唯物論ときりはなせないものである。とすれば、その平行線ももとを正せば、観念弁証法ヘーゲルを出発点とし、唯物弁証法マルクスを終結点とする1本のジグザグであるかも知れない。急がば廻れ。マルクスとともにその思想的発展を追ってこのジグザグを歩むならば、あるいはマルクス—ヘーゲル関係の問題解決に1すぢの光明を見出すことができるかも知れない。と考へて、ここにその第1段階として、大学時代のマルクス思想の成果ともいふべき『学位論文—デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異について』をとりあげてみたわけである。

ところで実のところ、マルクスの以後の思想発展の出発点でもあるこの『学位論文』そのものからして、マルクス—ヘーゲル関係の問題も、諸説ふんふんといった状態である。今それをおおざっぱに整理してみると、『学位論文』時代のマルクスの思想は、

(A)ヘーゲル左派であったという見解(メーリング, リアザノフ, 城塚, 淡野)

(B)ヘーゲル左派をのりこえ、すでに唯物弁証法の萌芽をみせ、ある面ではヘーゲルと結びついているという見解(ルカーチ, コルニユ)

の2つにわけることができよう。このわけ方は『学位論文』をヘーゲル左派, 青年ヘーゲルの立場と同一視する

か否かを基準としたもので、それぞれ(A)および(B)内部でも若干見解の相違はみられることをあらかじめおことわりしておく。以下これらの評価の検討を行う前に、順序としてマルクスの『学位論文』そのものについて簡単に紹介しておこう。

I

マルクスの『学位論文』は2部にわかれ、第1部はデモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異を一般的に、第2部は個別的に論じたものである。残念ながら現在我々に伝えられているものは、マルクスが1841年にイェナ大学に提出した『学位論文』そのものでなく、彼のいわゆる10冊の手稿にもとづいたものであり、第1部のIVとその結論にあたるV、ならびに附論のほとんどが欠けている²⁾。まず第1部からみてみよう。

さて、この『学位論文』の公刊者メーリングの解説によれば³⁾、ヘーゲルによってその思弁的立場から低く評価されたギリシャの自意識哲学、エピクロス、ストア、懐疑の3学派は、その後ぼっこうしつ々あるドイツ・ブルジョアジーを背景として自由主義を旗じるしに立ちあ

2) 『学位論文』の公刊の事情については、cf.; Marx/Engels Gesamtausgabe. Erster Abt., Bd. 1, Erster Halbbd., Hrsg. v. D. Rjazanov. Frkf. a. M. 1927. (以下 MEGA. I—1/1 と略記する) IXXX—XXXI.

予め『学位論文』の内容目次だけでも示すならば、次の通りである。

第1部 デモクリトスとエピクロスの自然哲学の一般的差異

I 論文の対象。II デモクリトスとエピクロスの自然哲学の関係についてのもろもろの判断。III デモクリトスとエピクロスの自然哲学の同一性にかんするもろもろの困難。IV デモクリトスとエピクロスの自然哲学の一般的原理的差異。V 結論。

第2部 デモクリトスとエピクロスの自然哲学の個別的差異。

第1章 アトムの直線からの偏差。第2章 アトムのもろもろの性質。第3章 原理としてのアトムと原素としてのアトム。第4章 時間。第5章 気象。

附録 エピクロス神学にたいするブルタルコスの論難の批判

まえがき。I 人間と神の関係。—1 おそれと彼岸的存在。2 敬神と個人。3 摂理と見さげられた神。II 個人の不死。—1 宗教的封建主義について。下層民の地獄。2 多数者のあこがれ。3 選ばれた者の自負。

3) (イ) F. Mehring (Hrsg.); Gesammelte Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels. 1841 bis 1850. Bd. 1, Stut., 1902. S. 41—62.

(ロ) メーリング『カール・マルクス—その生涯の歴史—』(栗原佑訳)第1巻36—49頁。

1) 経済研究第8巻第3号, 262—266頁。

がった青年ヘーゲル派から高く評価しなおされ、たとえばB. パウアーはその一連の福音書批判のなかで、このギリシャの自意識哲学から個人の主体的自由と批判精神を汲みとった、という。また同じく青年ヘーゲル派ケッペンは、マルクスに献じたという『フリードリヒ大王とその敵対者』(1840年)のなかで、かつてのプロイセンの英雄フリードリヒ大王を啓蒙の体现者と賛美し、その基礎としてこれらギリシャの3学派をあげ、それによって当時のプロイセンの反動にたいする批判、その啓蒙化、近代化を主張した。マルクスがこのような市民的啓蒙と結びついた青年ヘーゲル派のギリシャ自意識哲学にたいする評価から、すくなくとも影響をうけてこの『学位論文』を書いたことは、その序文ならびに第1部Iの「論文の対象」から明らかに読みとれるところである。すなわち、プラトン、アリストテレスに至ってその頂点に達したギリシャ哲学史にあって、それに続く・しかしなくてもよい附録として低い地位をあたえられてきたエピクロス、ストア、懐疑の3学派から、とりあえずエピクロスをマルクスは対象としてとりあげ、彼の哲学がデモクリトスの自然学とキュレネ派の道德観の折衷といわれ、その自然学もデモクリトスの借りものまたは改悪にすぎないという偏見、誤解からエピクロス哲学を解放してその独自性を強調し、それによって今まで軽視されてきたエピクロスをここで高く評価しようとする。これがマルクス『学位論文』の意図するところである。第1部は残念ながら我々に伝えられているかぎり、エピクロスの自然学をデモクリトスと同一視する偏見にたいし、その原理からするマルクスの次のような反ばくがみられるだけである。

すなわち、マルクスによれば、デモクリトスは感性的世界を主観的仮象とみなして科学的真理について懐疑的な態度をとるに反し、エピクロスは感性的世界を客観的現象だとし科学的真理については独断的である。したがって、それだけにデモクリトスは実証的知識を求めんと経験的世界をさまよい歩き、エピクロスは逆に経験を軽べつし、みずからの哲学に安住し不安にかられることがない。要するに、太陽は目にみえるよりも大きいとして科学者たらんとするデモクリトスは、いっさいを必然性のもとで考察し絶えず不安につきまといわれているにたいし、太陽は目にみえる大きさ2呎だとして安んずるエピクロスは、必然性にたいして偶然の契機を強調し人間自由への道を切り開いている。このように、デモクリトスと原理的に反対の立場をとるエピクロスが、どうしてデモクリトスの単なるひよう窃者だったといえようか。

残念ながら第1部はここまでしか我々には伝えられて

いない。続いて第2部「デモクリトスとエピクロスの自然哲学の個別的差異」をみてみよう。そこではマルクスは、第1部でのべた両者の差異を、こんどは自然学の個々の内容に立ちいって、主としてアトム論を中心として考察し、エピクロスの独自性を強調する。それは次のように。

デモクリトスによれば、世界は空虚な空間とそのなかを間断なく落下する・無数の形態の違ったアトムからなっている。そして大きなアトムは小さなアトムより速く落ち、したがって小さなアトムと衝突し、そこに側面運動とうずまきが生ずる。したがってデモクリトスはアトムの運動として、①直線的な落下と②多くのアトム間の反発の2つを考えたわけである。これにたいしエピクロスは、さらに③直線からの偏差運動をつけ加えた。マルクスはそこに注目し、その意義を次のようにみていく。そもそも点が線において止揚されるように、直線的な落下運動にあっては、そこで落ちる物体がリングであるか鉄片であるかは問題とならない。したがってアトムも①では、その個性は止揚され非独立的なものとなっている。しかし他方、アトムは他のなにものにも規定されない・他者との関係いっさいを否定する絶対的自立性をもったものである。とすれば、このことは①を否定する運動、すなわち直線からそれる③の運動として表現せざるをえないだろう。これが③の意義である。そこには、デモクリトスとちがって、いっさいの必然性、宿命論を拒否して人間の自由を主張するエピクロスの世界観が示されている。アトムの物質性、質料的存在しかみなかったデモクリトスにたいし、エピクロスはこの③で、アトムの自立性、精神的本質、形式を強調したのである。しかしここで我々の見落すことのできない点は、この③で表現されているアトムの自由、独立性が、それを止揚する存在様式である①の直線運動からそれることによって、主張されているということである。このような自由論は、ここアトム論ばかりでなく、エピクロスの哲学全体を貫いているものであり、彼の道德論において快樂は苦痛の回避なりとしたのも、これによったものである。しかし、このように自己の自立性を侵害するものからのがれ、それを回避することによって得られる自由は、なんら真に具体的な自由でなく、せいぜいのところ抽象的個別的な自由にすぎない。したがって、③で示されたアトムの自立性は、②の反発運動でその積極的にして最高の表現をかくとくするとしても、それはその抽象性によって直接的にその反対物に転化されてしまう。すなわち②の反発運動においては、アトムは他者によって規定される関係、運動いっさいを否定しているために、③にお

いてあたえられたアトムの自立性、観念性が実現されていると同時に、そこでは反発という形であれ1つのアトムは他のアトムと関係するために、①においてあたえられたアトムの制約性、物質性も貫かれていることとなるのである⁴⁾。とはいえ、この②の反発運動を盲目的必然性としてアトムの物質的側面しか理解しえなかったデモクリトスとはちがって、エピクロスは③の偏差運動でアトムの精神的側面を強く前面に押し出すことによって、これらアトム概念の矛盾する2契機を②の反発運動でよく実体化することができたのである。

ところで、以上のエピクロスのアトム論で示されたアトム概念の2つの契機、質料と形式、あるいは存在と本質の矛盾は、さらに彼のアトム属性論にも一貫して展開されている。すなわちエピクロスは、一方でアトム概念の1契機である質料的側面から、アトムには大きさ、形、重さといった可変的な属性があることをみとめながら、他方ではもう1つの契機である形式的側面から、これら可変的な属性はアトムの自立的本質に反するとして否定する。ここでもエピクロスは、デモクリトスがただ経験的にアトムの属性を列挙しているにたいし、それをアトム概念の矛盾として客観化するのである。このことは生成、消滅という可変的な「時間」概念にたいするエピクロスのとらえ方にもあらわれてくる。すなわちエピクロスはこのように可変的な時間を、不変的永遠的なアトムの本質世界とあいられないものとして、そこから排除するが、しかしデモクリトスのようにそのまま時間を見捨てるのではなく、それを変易的な現象世界の絶対的形式とする。こうしてエピクロスにあっては、時間が現象を現象たらしめる本質的原理とされることによって、現象の世界は本質から区別された、いわば本質の疎外として客観的な世界とみとめられることとなり、また時間=現象の本質=現象の自己内反省=感性的知覚ということから、感性的知覚は具体的自然の唯一の基準とされる。エピクロスが太陽は目にみえる大きさ2呎で安んじていられたのも、ここにあるといえよう。

しかし、以上「直線からの偏差運動」からはじまってそのアトム論の発展を形成してきたアトム概念の本質と現象、形式と質料の矛盾は、最後の「天体」論において融和、統一されることとなる。すなわち、天体はそれぞれ独自の重さをもって空間を自立的に運動し、それも単なる直線運動でなくて直線から屈折して反発と引力の体

系を形成し、しかも現象の形式である時間をつくり出している。したがって、いままで形式と対立するものとされてきた質料も、この天体の体系において不変の自立性を持つこととなる。あるいは天体は現実となったアトムであるともいえよう。しかし、このようにアトムの矛盾の解決点である天体において、抽象的個別的自意識を原理とするエピクロス哲学は最大の矛盾にぶつかる。というのも天体はまさに具体的な個別者であり、普遍的なものであるから。そこでエピクロスは、個別的自意識の平安をかきみだす致命的な敵「天体」を否定し、その哲学原理である抽象的個別的自由と自意識の絶対性を貫徹しようとする。かくてエピクロスは、この「天体」論において、単にデモクリトスにたいしてばかりでなく、天体を不滅なりとして神聖視するギリシャ哲学全体の一般的傾向にたいし反対の態度をとっていることとなるのである。したがって、エピクロスはギリシャのもっとも偉大な啓蒙家であったといえよう。

こうしてデモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異は、一般的ばかりでなく自然学の個々の内容についても明らかとなった。すなわち、エピクロスにあっては、アトム論はそのいっさいの矛盾とともに、抽象的個別的自意識の自然学として最後の帰結に至るまで徹底されているにたいし、デモクリトスのアトム論はただ経験的な自然研究の客観的表現にすぎず、エピクロスのように力強い原理とまでなっていないのである。大体以上が、マルクス『学位論文』本論の主な内容である。

そのほか『学位論文』には「エピクロス神学にたいするブルタルコスの論難の批判」と題する附論がつけられているが、それも我々にはわずかな断片しか伝えられていない。しかしマルクスのいわゆる7冊の『準備ノート』の第3輯から判断すると⁵⁾、この附論は、そのアトム論から神はいっさいの定在、世界を回避する抽象的個体の最高の自由とみなしたエピクロスの宗教観、あるいは快樂は苦痛の回避としたエピクロスの道德観にたいし、それは神にたいするおそれ、靈魂不滅を汚し、きずつける

5) リアザノフは、マルクスがこの『学位論文』の準備として「1839年冬」以来書きはじめた7冊のノートを、MEGA. I—1/1, S. 83 f. に収載しているが、その内、第3輯はほとんどこの附論に照応するものと推定されている。cf. MEGA. I—1/1, XXXII. なお、この『準備ノート』第3輯にもといづて、次のようなすぐれた附論の研究書があることを附記しておく。D. Baumgardt, „Über den (verloren geglaubten) Anhang zu Karl Marxens Doktordissertation“. [Gegenwartsprobleme der Soziologie. A. Vierkant zum 80. Geburtstag. Hrsg. v. G. Eisermann, Potsdam, 1949. S. 101—115.]

4) したがって、マルクスはこの反発を「自意識の最初の形式」であり「みずから直接的に存在するもの、抽象的個別者としてとらえる自意識に照応する」ものといっている。cf. MEGA. I—1/1, S. 31.

ものと非難するプルタルコスPlutarchusの論難の無根拠を反批判したもので、結局のところエピクロスEpicurusの無神論をたたえたものであるといえる。そのほか、本文註解のなかには、当時のヘーゲル学派にかんするマルクスの見解がのべられてある重要な文章が含まれているが、それについてはあとでふれることとして、一応これでこの『学位論文』の紹介は終りとして、次にこれにたいする評価の問題に移ってみたいと思う。

II

さて、以上のようにマルクスがエピクロスをギリシャ最大の啓蒙家として、無神論者として、そしてデモクリトスの必然性にたいし偶然の契機を強調するエピクロスのアトム論を抽象的個別的自意識の哲学原理として高く評価していること——このことから、『学位論文』を同じく市民的啓蒙の立場からエピクロスらギリシャの自意識哲学を理論闘争の武器としたパウアー、ケッペンといった青年ヘーゲル派と同じ立場に立つものとみなす(A)のメーリングらの見解は一応妥当なものといえよう⁶⁾。この(A)の見解をとるもののなかには、マルクスがここで使っている概念や表現方法からヘーゲル哲学との結びつきを強調するものもいるが⁷⁾、それは当時の青年ヘーゲル派一般の傾向でもあったのだから、大した論拠とはならない。それ以外にメーリングは、マルクスがここでエピクロスをアトム論の科学の創設者とした——実は、それはデモクリトスであって、エピクロスはアトム論の哲学を創造したにすぎないのだが——ことは、哲学を唯一の科学とみなしていたヘーゲル哲学にマルクスがいかに深く執着していたかを示すものだと述べている⁸⁾。しかし、このような自然科学史からみたマルクスの弱点は、またエピクロスの主体的な意志自由の原理に興味をひかれたマルクスの強味を、したがって青年ヘーゲル派の立場を示すものだとメーリングもみとめているのであるから⁹⁾、これをもってメーリングの『学位論文』にたいする評価と限定することは正当といえない¹⁰⁾。ところでこ

のように『学位論文』を青年ヘーゲル派と同じとする評価にたいし、異説を主張するのが(B)の見解である。まずコルニュの見解からみてみよう。

コルニュは¹¹⁾、『学位論文』の中心課題を人間と環境の関係、人間の環境にたいする働きかけの可能性にかんする問題の解明にあるとみる。したがって、マルクスはたしかに一方では、デモクリトスの宿命論、機械的唯物論にたいし人間自由の可能性を強調したエピクロスを高く評価し、プルタルコスにたいしエピクロスの無神論を弁護している点で青年ヘーゲル派の線上を歩んでいたとコルニュもみるが、しかしまた他方では、エピクロスの主張する自由が、すでに前にもふれておいたように、人間と環境のからみあい、その必然性を見通しによって得られる自由でなく、ただ環境からのがれ、それと対立することによってのみ得られる抽象的個人的自由にすぎないこと、したがってそこには、パウアーのように歴史の発展をただ現実にたいする人間の不断の反抗によって説明する・青年ヘーゲル派の主観主義にたいするマルクスの批判点が含まれている、とコルニュはみる。その論拠としてコルニュはヘーゲルおよびヘーゲル学派にかんするマルクスの本文註解ならびにノートをあげているが¹²⁾、それによればこうである。哲学史を世界史の進展にそくして考察するならば、アリストテレスやヘーゲルのような偉大な哲学体系、精神と世界が調和して1つの完結された具体的全体性が築かれたあとでは、こんどはこの世界が非理性化していくことの結果として、精神は今まで調和していた世界から分離し、それと対立し、それを変革していこうとする意志として、または批判哲学となってあらわれてくる。アリストテレスのあとにエピクロスらの自意識の哲学が起り、ヘーゲルのあとに青年ヘーゲル派の運動が続いたのも、このような歴史的必然性によるものである。しかしこのように世界に背をむけ、それ

観念論的で、のちにマルクスによって完全に克服された」ものだと一般に評価されているとして、メーリングの解説を批判している。しかしこのリアザノフのメーリング批判が一面的であることはここで筆者の明らかにしたところでありまたメーリングのその解説全体からもそのような印象はそれほど強くない。むしろ、メーリングがマルクスの『学位論文』をただヘーゲル的だと評価しているような一般の誤解を解消するためにもこのようにメーリングを弁護することは必要と思われる。cf. MEGA. XXXVI. I—1/1. 城塚登, 既出書, 45頁。

11) A. Cornu, Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werk. 1, 1818—1844. Berl., 1954. S. 162—183.

12) MEGA. I—1/1, S. 63—66, 131—133.

6) (イ)F. Mehring, a. a. O. (ロ)D. Rjazanov, MEGA. I—1/1, XXXVI. (ハ)城塚登『社会主義思想の成立』昭和30年, 37—49頁。(ニ)淡野安太郎『初期のマルクス』昭和31年, 68頁, 320頁。

7) 城塚登, 既出書, 44—45頁。

8) F. Mehring, a. a. O. S. 56.

9) F. Mehring, a. a. O. S. 56.

10) リアザノフは、メーリングがこの『学位論文』をその『マルクス・エンゲルス遺稿集』のなかで公刊して以来、メーリングがそれに附した批判的解説にしたがって、この『学位論文』は「まったくヘーゲル的

と対立していることによって、今まで世界と調和して具体的全体性となっていた哲学は具体的でなく抽象的全体性におとしめられることとなる。したがって批判哲学はここにみずからの哲学を実現し世界を哲学化しようとするが、それはその哲学の抽象的全体性という欠陥の止揚にみちびかざるをえないだろう。こうして批判哲学は次のあたらしい哲学と世界の調和がもたらされるまでの過渡期の哲学であるといえる。このように哲学、精神と世界との内的結合の問題をヘーゲルから引きつぎ、しかも両者の相互作用という形でヘーゲルをのりこえたマルクスは、ここに、青年ヘーゲル派の主観主義をエピクロス哲学の分析を通して批判したのである。たとえば、エピクロスがデモクリトスの必然性に対抗して強調した偶然性は、現実的可能性とはほど遠い空想、抽象的可能性にすぎないこと、したがってそこでは客体のリアルな根拠を探求しようとするなんらの関心もない、とマルクスは『学位論文』本論のなかでも批判している¹³⁾。これはまさにこの世界の具体的な変革をなんら問題としない青年ヘーゲル派の批判哲学の弱点をついたものといえよう。以上が(B)『学位論文』は青年ヘーゲル派をのりこえているとみるコルニュの論旨である。次に、コルニュとはちがった論拠ではあるが、同じく(B)の評価をあたえているルカーチの見解をみてみよう¹⁴⁾。ルカーチもコルニュと同じくマルクスの「ヘーゲル学派にかんする註解」に注目し、次の点で『学位論文』は青年ヘーゲル派をのりこえているとみる。すなわち、ヘーゲル哲学にたいして、その保守的な殻をうち捨てて革命的な核心さえ引き出せば事足りるとしてヘーゲルの2面性をきりはなしてしまう青年ヘーゲル派一般の傾向にたいし、マルクスはそれにとどまらず、ヘーゲルの現状肯定的保守的結論を革命的弁証法の不徹底さに求め、したがってそれを徹底することによってヘーゲルの矛盾を止揚しようとした¹⁵⁾。そしてそこにすでにヘーゲルを批判的に発展させる深さにおいて、マルクスが他の青年ヘーゲル派をこえたものがあるとルカーチはみる。もちろんこのことはここではマルクスの提言にとどまっておき、ヘーゲル観念弁証法の矛盾にたいするマルクスの批判は具体的にまだ展開されてない。しかしそのヘーゲルにたいする対決は

ここでは哲学史の領域ですでに開始され、マルクスがヘーゲルによって低く評価された唯物論者エピクロスをとりあげて、それを啓蒙家、無神論者として高く評価したことはそのあらわれであり、特にデモクリトスの必然性にたいして偶然の契機を強調するエピクロスのアトム論には、人間的解放のイデオロギーとしての唯物論にたいするマルクスの共感が、したがって弁証法的唯物論の萌芽がみられる、とルカーチはみる。以上、(A)、(B)をまとめるならば、(A)のメーリングらによって青年ヘーゲル派と同一の立場とみなされたマルクスのエピクロス評価を、(B)ではむしろ青年ヘーゲル派をのりこえるものとして、すなわちコルニュはそれを批判的評価とみ、ルカーチは、積極的に唯物弁証法の萌芽とみているといえよう。すでに紙数も尽きたので、最後にこれら(A)、(B)の評価に若干私見を加えて終りとしたい。

基本的にいって、この『学位論文』、そこにあらわれたマルクスのエピクロス評価は、(A)と同様、青年ヘーゲル派の立場からする肯定的なものと私は解したい。たしかにコルニュやルカーチのいうように、『学位論文』その他『準備ノート』には、エピクロスの主観主義や青年ヘーゲル派の批判主義にたいしマルクスが一定の留保条件をつけている叙述が散見されるが、しかしそれはここではマルクスの背後にひめられたものであって、コルニュのように、これをもってこの『学位論文』を青年ヘーゲル派にたいする批判の書とみるには、当時のマルクスとバウアーら青年ヘーゲル派との交友関係からみても充分人を納得させるものとは思えない。ましてそこに唯物弁証法の萌芽をみるルカーチの見解は、『学位論文』にたいする全体的な理解を欠いた、ひいきのひき倒しといった感がある。やはりこの『学位論文』は、マルクスがその序文でプロメトイスの言葉「卒直にいえば、すべての神々に私は憎悪をいだく」を引用して、これは「人間の自意識を最高の神格としてみとめない……神々にたいする哲学固有の宣言である」と、つけ加えていることから明らかかなように¹⁶⁾、当時宗教にたいする哲学の勝利のために闘っていた青年ヘーゲル派と同じ立場に立つと解するのが妥当な解釈ではなかろうか。

〔追記—本稿は、一橋大学経済研究所大野助教授をはじめとして、一橋大学大学院学生藤森、畑両君の討論によるところ大であった。〕

13) MEGA. I—1/1, S. 23—24.

14) G. Lukacs, „Zur Philosophischen Entwicklung des jungen Marx (1840—1844)” [Deutsche Zeitschrift für Philosophie. II/II 1954, Berl. S. 290—295.]

15) MEGA. I—1/1, S. 63—64.

16) MEGA. I—1/1, S. 10.